

AWS vs さくらのクラウド 最適選定診断 解説ガイド

— 13の質問が示す、クラウド選定の判断軸 —

本書は、当社が提供する「AWS vs さくらのクラウド 最適選定診断」を受診いただいた方に向けて、診断を構成する13の質問それぞれの意図と背景を解説するガイドです。

クラウド選定は、単純な機能比較では答えが出ません。月額コスト、セキュリティ要件、データ保管場所、社内の運用体制、将来の事業展開——判断に影響する要素は多岐にわたり、しかも相互に関連しています。

診断の各質問は、こうした要素の中から「選定結果を実際に左右するもの」だけを抽出して設計されています。

本書を読むことで、以下のことが分かります。

- なぜその質問が選定に影響するのか、という技術的・ビジネス的な背景
- 各選択肢がAWS・さくらのクラウドのどちらに有利に働くのか、その理由
- 診断結果を社内の意思決定にどう活かせばよいか

想定読者は、Webディレクター・システム開発者など、**インフラ専任ではないものの、クラウド選定の意思決定に関わる方**です。専門用語には都度説明を加えていますので、インフラの実務経験がなくてもお読みいただけます。

診断の全体設計 — 2つのフェーズ

診断は2つのフェーズで構成されています。

PHASE 1 (Q1～Q11) はクラウド選定です。 回答ごとにAWS・さくらのクラウド双方への適合度を加点し、最終的なスコア差から「AWS推奨」「さくらのクラウド推奨」「ハイブリッド構成推奨」のいずれかを判定します。重要なのは、この診断が「どちらが優れているか」ではなく「貴社の条件ではどちらが合うか」を測っている点です。同じクラウドでも、使う企業の条件次第で最適解は変わります。

PHASE 2 (Q12～Q13) はサポート体制の診断です。 クラウドは「選んで終わり」ではなく、構築・運用・監視という長い付き合いが始まります。社内のエンジニアリソースと委託したい範囲を確認し、当社の4つのサービスプラン（情報提供／構築支援／運用支援／フルマネージド）から最適なものをご提案します。

PHASE

01

クラウド選定

(Q1～Q11)



サービスの展開エリアを教えてください

質問の意図

利用者の地理的分布は、クラウドの「リージョン（データセンターの地域拠点）」選択に直結する、選定の出発点となる質問です。

Webサービスの応答速度は、ユーザーとサーバーの物理的距離に影響を受けます。海外ユーザーに日本のサーバーからコンテンツを届けると、距離に起因する遅延が発生します。AWSは**世界39リージョン・123のアベイラビリティゾーン**を展開しており、ユーザーの近くにサーバーを配置する設計が可能です。一方、さくらのクラウドは東京・石狩を中心とした国内リージョンでの提供であり、**国内ユーザー向けであれば距離の問題は生じません**。

(2026年7月時点)

「今は国内、将来は海外も」という回答が中間スコアになるのは、初期は国内特化の構成で開始しつつ、拡張時にCDN（コンテンツ配信ネットワーク）やハイブリッド構成で対応する選択肢が残るためです。

選択肢	この回答が意味すること
国内のみ	国内リージョンで完結できるため、さくらのクラウドのコスト・サポート面の強みを最大限活かせます。
グローバル展開も予定	海外ユーザーへの低遅延配信にはAWSのグローバルインフラが必要になります。
今は国内、将来は海外も	当面はさくらで開始し、拡張時にAWSを組み合わせる段階的な設計が候補になります。

データ保管や調達に関する要件はありますか？

質問の意図

「データをどこに置けるか」「どの事業者と契約できるか」という制約は、技術要件よりも先に選択肢を絞り込む条件です。

ここで重要なのは、「国内保管」と「国内事業者」を区別することです。AWSにも**東京リージョン・大阪リージョン**があり、データを日本国内に保管する構成はAWSでも実現できます。したがって「国内にデータを置きたい」だけであれば、両クラウドとも候補になります。

一方、公共調達や政府系案件では「**国内事業者が提供するクラウドであること**」が調達条件になるケースがあります。この場合、**国内企業であるさくらインターネットのクラウドが要件を満たす選択肢**となります。医療・金融分野でも、社内ポリシーとして国内事業者を指定している企業は少なくありません。

選択肢	この回答が意味すること
国産クラウド・国内事業者が必須	調達条件レベルの制約であり、さくらのクラウドが実質的な候補になります。
国内リージョン保管（事業者不問）	AWS東京・大阪リージョンでも対応可能。両クラウドが候補に残ります。
特に制約はない	保管場所の制約なしにサービス・コスト面から自由に選定できます。

アクセス数のパターンはどちらに近いですか？

質問の意図

トラフィックの変動パターンは、料金体系（従量制 vs 固定制）とスケーリング機構の適合性を測る質問です。

ECセールや広告キャンペーンでアクセスが通常の数十倍になるサービスでは、ピークに合わせたサーバーを常時確保するとコストが無駄になります。AWSのAuto Scalingは、負荷に応じてサーバー台数を自動的に増減させる仕組みで、「使った分だけ支払う」従量課金と組み合わせることで、ピーク対応とコスト効率を両立できます。

さくらのクラウドにもオートスケール機能はありますが、**エコシステムの充実度と実績の面ではAWSに強み**があります。逆に、アクセスが安定しているシステムでは自動増減の必要性が低く、**さくらの固定料金による予算の立てやすさ**がメリットになります。

選択肢	この回答が意味すること
急激に増減することがある	AWSのAuto Scaling + 従量課金がコスト効率と可用性の両面で有利です。
緩やかに成長していく	計画的なスペック増強で対応できるため、どちらでも運用可能です。
ほぼ安定している	固定料金のさくらのクラウドで無駄なくコストを固定化できます。

データの保管量と、今後の増加見込みは？

質問の意図

オブジェクトストレージの容量制限と拡張性の違いは、後から変更しにくい「見落とされがちな分岐点」です。

この質問は、当社の過去案件での実際の教訓に基づいています。ユーザー数の増加に伴いデータ保管量が段階的に増え続ける要件のシステムでは、ストレージの**容量上限と拡張時の制約**が選定の決定打になることがあります。

さくらのオブジェクトストレージは標準プランで1バケットあたりの初期制限があり、利用状況により制限緩和を相談できますが、アーカイブプランでは契約容量を超えるとアクセスが制限される仕様です。一方、Amazon S3は事実上無制限にスケールする設計であり、数十TB超の大容量や急増が見込まれる場合の安全な選択肢となります。

システム稼働後にストレージ基盤を移行するのは大きなコストと停止リスクを伴います。「将来の増加見込み」まで含めて回答いただくのはこのためです。

選択肢	この回答が意味すること
少量・安定（数百GB以下）	どちらのストレージでも十分対応可能。データ転送無料のさくらがコスト面で有利です。
数TB規模または段階的に増加	将来の制限緩和交渉や移行リスクを避けるならS3の拡張性が安心材料になります。
大容量（数十TB～）または急増予定	Amazon S3の実質無制限のスケラビリティが必要な領域です。

セキュリティ・コンプライアンスの要件はどの程度ありますか？

質問の意図

WAF・アクセス制限・ログ管理などの要件数は、必要なセキュリティサービスの充実度と構築難易度を左右します。

「WAF必須」「アクセス制限必須」「ログ管理規程あり」「アンチウィルス必須」——お客様との契約や社内規程で複数のセキュリティ要件が定められている場合、それらを満たすサービス群が揃っているかが選定基準になります。AWSはWAF、Shield（DDoS対策）、CloudTrail（操作ログ）、GuardDuty（脅威検知）など、**要件ごとに対応するマネージドサービスを組み合わせる設計**できます。

さくらのクラウドも**ISMAP登録やISO系認証**を有しており、基本的なセキュリティ要件には十分対応できます。要件が「バックアップと基本的な監視」程度であれば、シンプルな構成で運用負荷を抑えられるさくらの方が扱いやすいケースもあります。要件の数と複雑さが、必要なサービスの幅を決めるという関係です。

選択肢	この回答が意味すること
複数の要件が必須	要件ごとに対応するAWSのマネージドセキュリティサービス群が構築を容易にします。
バックアップ・基本的な監視程度	両クラウドとも標準機能で対応可能。構成のシンプルさで選べます。
基本的なファイアウォールで十分	過剰なセキュリティ投資を避け、さくらのシンプルな構成が適しています。

システムの開発スタイル・構成はどちらに近いですか？

質問の意図

採用する技術スタック（サーバーレス／コンテナ／従来型VM）によって、利用できるサービスの選択肢が大きく変わります。

「サーバーレス」とは、サーバー管理をクラウド側に任せ、プログラムの実行に専念できる仕組みです。AWSのLambdaやFargate、さくらのクラウドのApp Runなどが代表例です。周辺サービスとの連携や導入実績の豊富さでは**AWSに長所がある一方、シンプルな構成やコストの把握しやすさではさくらのクラウドに利点**があります。

このように、機能の拡張性を重視するか、運用の分かりやすさを重視するかで適した選択肢は変わります。

また、利用予定のCMSやパッケージ製品によっては特定のクラウドが推奨環境に指定されているケースもあるため、システム全体の要件を整理して選定することが重要です。

選択肢	この回答が意味すること
サーバーレス・モダン構成を予定	Lambda等のエコシステムが充実しているAWSが第一候補になります。
コンテナ・マイクロサービスを検討	ECS/EKS等のマネージドサービスの豊富さでAWSがやや有利です。
従来型のサーバー構成で十分	シンプルなVM構成はさくらのクラウドの得意領域です。

AI・機械学習の活用は検討していますか？

質問の意図

AI/ML活用の有無は、両クラウドのサービスラインナップの差が最も大きく表れる領域です。

レコメンドエンジンや生成AIなどの機能をサービスに取り入れる場合、AWSのSageMakerやBedrockといったマネージドサービスを活用することで、**開発コストを抑えて迅速に実装**できます。

一方、さくらのクラウドは**AI向け高火力GPUサーバーなどの計算基盤に強み**があり、自前でモデルを運用・学習させる構成に適しています。**高度なAI機能をAPIで手軽に組み込みたい場合はAWS、自社専用のGPU環境でコストパフォーマンスを追求したい場合はさくら**、といった使い分けが考えられます。また、AI処理はAWS、データ保管はさくらというハイブリッド構成も有効な選択肢です。

選択肢	この回答が意味すること
積極的に活用したい	SageMaker・Bedrock等のマネージドAIサービスを持つAWSが必須級の選択になります。
将来的には検討するかもしれない	拡張性を考慮しAWS寄りの判定ですが、ハイブリッドでの後付けも可能です。
今のところ予定なし	AI関連サービスの差は選定に影響せず、他の条件で判断できます。

システム監視・障害対応の要件はどの程度ですか？

質問の意図

「システムが止まったとき、どれだけ早く誰が対応すべきか」という要件は、監視ツールの充実度と運用体制の両方に関わります。

この質問で測っているのは、クラウド基盤そのものではなく「**その上で動くシステムの監視・障害対応**」の要件です。

24時間365日の有人監視が必要なミッションクリティカルなシステムでは、CloudWatchをはじめとするAWSの監視エコシステムの充実度が構築のしやすさに影響します。

ただし、有人監視そのものはクラウドの機能ではなく運用サービスの領域です。当社のような運用パートナーが監視・障害対応を担う場合、どちらのクラウドでも24時間365日体制を構築できます。日中帯の対応で十分なシステムであれば、シンプルな監視構成で済むさくらのクラウドが運用しやすい選択です。

選択肢	この回答が意味すること
24時間365日・有人監視が必須	監視エコシステムの充実したAWS+運用パートナーの組み合わせが標準解です。
24時間・自動アラートがあればOK	自動検知・通知は両クラウドとも対応可能です。
日中帯の対応のみで問題ない	シンプルな監視構成で済み、さくらの標準サポート時間帯とも合致します。

月額費用の管理方針はどちらを重視しますか？

質問の意図

従量課金と固定料金は思想が根本的に異なり、「会社としてどちらの予算管理がしやすいか」が選定の分かれ目になります。

AWSは「使った分だけ支払う」従量課金が基本です。柔軟にコストを最適化できる反面、月次の請求額が変動し、特に**インターネット向けのデータ転送量**に応じた課金は見落とされがちなコスト要因です。ドル建て課金のため為替変動の影響も受けます。

さくらのクラウドは月額固定料金が基本で、データ転送料も無料です。請求額が読めるため予算計画が立てやすく、経営層への説明もシンプルになります。「予算超過のリスクを避けたい」のか「使わない月のコストを削りたい」のか——組織の予算管理文化そのものを問う質問です。

選択肢	この回答が意味すること
毎月の費用を固定・予測したい	固定料金＋転送料無料のさくらのクラウドが予算管理の要求に合致します。
ある程度の変動は許容できる	年間予算内で管理できるなら、どちらの料金体系でも運用可能です。
使った分だけ払う柔軟性を重視	AWSの従量課金＋リザーブドインスタンス等でコストを能動的に最適化できます。

Q10 サポート言語の要件は？

質問の意図

障害や設定上の問題が発生した際に、「どの言語で、どこまで自社で対応できるか」を確認する質問です。

クラウド運用では、障害情報や技術ドキュメントを確認しながら原因を切り分けます。英語の情報やサポートを利用できれば、調査手段やサービスの選択肢が広がります。

さくらのクラウドは、**平日日中の標準対応に加え、有償で24時間365日の日本語サポートを提供**しています。

AWSも日本語に対応していますが、**24時間365日の迅速な電話・チャット対応には、Business Support+などの上位プランが必要**です。英語情報を活用して自社で調査できるか、障害時に日本語で即座に相談できる体制を求めるかが、判断の分かれ目になります。

選択肢	この回答が意味すること
日本語での有人サポートが必須	障害時にも日本語で相談できる体制を重視するため、さくらのクラウドの日本語サポートが運用方針に合致します。
英語対応でも問題ない	英語の公式ドキュメントや技術情報を活用して自走できるため、AWSの豊富な情報資産を最大限活用できます。

権限・アクセス管理の方針は？

質問の意図

クラウド環境を操作する担当者の人数や役割は、必要となる権限管理の細かさと、日々の運用負荷を左右します。

クラウドの管理画面では、設定変更やデータ削除など、システム全体に影響する操作が可能です。複数人で利用する場合は、開発者・運用者・閲覧者など、役割ごとに必要な権限だけを付与することが重要です。

AWSのIAMは、担当者や部署、外部パートナーごとに、操作できる範囲を細かく設定できます。**厳密な権限管理や社内規程への対応が必要な場合**に適しています。

さくらのクラウドにもIAMポリシーがあり、**少人数でのシンプルな管理から、複数担当者への役割別の権限設定まで対応**できます。

選択肢	この回答が意味すること
管理者は少数、シンプルな運用で十分	管理者を限定した運用であれば、複雑な権限設計を必要とせず、さくらのクラウドのシンプルな管理構成が適しています。
複数の担当者に役割別の権限を付与したい	担当者・部署・外部パートナーごとに操作範囲を細かく設定できる、AWS IAMの柔軟な権限管理が適しています。

PHASE

02

サポート体制 診断

(Q12～Q13)



PHASE 2 サポート体制診断でわかること

クラウドの選定が「何を使うか」の判断だとすれば、PHASE 2は「誰が面倒を見るか」の判断です。

クラウドは契約して終わりではなく、設計・構築・移行を経て、稼働後は監視・障害対応・セキュリティパッチ適用・コスト見直しという継続的な運用が始まります。

この2問で、貴社に必要なサポートの範囲を特定します。

社内のクラウド・インフラ担当エンジニアの状況は？

質問の意図

クラウドの設計・構築・障害対応を「社内で完結できるか」は、必要な外部サポートの量を決める最初の変数です。

クラウドの構築・運用には、ネットワーク設計、セキュリティ設定、監視構築、障害切り分けといった専門スキルが求められます。「ITは担当しているがクラウドは経験が浅い」という状況は多くの企業に共通しており、その場合は初期構築だけでも専門家の支援を受けることで、後々の運用トラブルやセキュリティ事故のリスクを大きく減らせます。

IT専任者がいない組織では、構築から運用まで一貫して委託できる体制が現実的な選択です。逆にクラウド専任エンジニアが在籍している場合は、構成案と見積もりの情報提供だけで自走できます。

選択肢	この回答が意味すること
クラウド専任エンジニアがいる	社内で完結可能。当社は構成案・見積もりの情報提供でご支援します。
IT担当はいるがクラウド経験は少ない	設計・構築フェーズの専門支援でリスクを抑え、運用は社内に引き継ぎます。
IT専任がおらず外部委託が前提	設計から24時間365日の運用監視まで、一貫した委託体制が適しています。

構築・運用のサポートはどの程度ご希望ですか？

質問の意図

委託したい範囲を「設計・構築」と「運用・監視」に分けて確認することで、過不足のないサービスプランを特定します。

この質問はQ12の「できるか」に対して「どうしたいか」を確認するものです。

両者は必ずしも一致しません。たとえば社内にエンジニアがいても、コア業務に集中させるために運用は外部委託する、という判断は合理的です。逆に、構築だけ専門家に任せて運用ノウハウは社内に蓄積したい、という方針もあります。

回答に応じて、当社の4つのサービスプランのいずれかをご提案します。

選択肢	この回答が意味すること
設計～構築のみ委託、運用は自社で	【構築支援プラン】設計・構築・移行を当社が担当し、運用マニュアルとともに引き継ぎます。
構築から運用・監視まで一括委託	【フルマネージドプラン】設計から24時間365日の監視・障害対応までを一貫して担当します。
設計・構築は自社で。運用・監視のみ委託	【運用支援プラン】構築済み環境を引き継ぎ、稼働後の運用・監視・障害対応を担当します。
自社対応できる。情報・見積もりのみ	【情報提供プラン】両クラウドの構成案と詳細見積もりをご提供します。

RESULT

03

診断結果の
読み方
判定ロジック



クラウド判定の仕組み

PHASE 1の各回答には、AWSとさくらのクラウドそれぞれへの適合度スコア（0～3点）が設定されています。全11問の合計を100%換算した「適合度」を両クラウドについて算出し、次のルールで判定します。

- 一方の適合度が他方を15ポイント超上回る場合 → そのクラウドを推奨
- 両方の適合度が60%以上、または差が15ポイント以内 → ハイブリッド構成を推奨

ハイブリッド判定が「引き分け」ではない点にご注意ください。

両クラウドへの適合度がともに高いということは、要件の中にAWS向きの部分とさくら向きの部分が混在していることを意味します。この場合、たとえば「データ転送量の多いバックエンドはさくら、グローバル配信とAI処理はAWS」のように役割分担する構成が、単一クラウドよりも合理的な解になります。

診断結果を意思決定に活かすために

本診断は、限られた質問数で方向性を示す簡易診断です。

実際の選定では、現行システムの構成、移行の制約、予算規模、既存ベンダーとの契約状況など、診断ではカバーしきれない条件が関わってきます。

診断結果は「結論」ではなく「社内議論のたたき台」としてお使いください。

特に、診断結果画面に表示される「判断ポイント」（どの回答がどちらのクラウドに有利に働いたか）は、選定理由を社内で説明する際の材料としてそのまま活用いただけます。

おわりに — 中立的な選定支援ができる理由

当社フューチャースピリッツは、AWSアドバンストティア サービスパートナーであると同時に、さくらのパートナー ネットワーク セールspartner アドバンストランクの認定を受けています。

両クラウドの正規パートナーであるからこそ、どちらか一方に誘導するのではなく、お客様の要件に対して公平な 比較提案が可能です。

通常、複数クラウドの比較検討にはベンダーごとのヒアリングと見積もり取得の手間が発生しますが、当社では 1回のヒアリングで両クラウドの構成案と見積もりを同時にご提示します。

無料コンサルティングのご案内

診断結果についてより詳しく知りたい方、実際の選定・構築を検討されている方は、
無料コンサルティングをご利用ください。

1



無料相談

無料相談フォームから
お申し込み（3分）

2



ご連絡

担当者より日程調整
（1営業日以内）

3



ヒアリング

オンラインで実施
（60～90分）

4



ご提案

最適構成と見積もりの
ご提示（3-5営業日）



今すぐお問い合わせください >

株式会社フューチャースピリッツ

<https://lp.future.ad.jp/aws-sakuracloud>

株式会社フューチャースピリッツ

1996年創業、京都本社のITサービス企業です。

	代表取締役	谷 孝 大
	資本金	1億円
	社員数	120名 ※2026年2月現在
	国内事業所	京都本社、大阪支社、東京支社
	海外拠点	タイ、中国
	事業内容	クラウドインテグレーション事業 デジタルマーケティング事業 SOLANOWA事業

サービス部門を横断し、ビジネス課題のソリューションを提供



